

太平洋戦争終戦直前、
シンガポールで食用野生植物の図説冊子を作った
3人の植物学者(2 郡場寛先生と渡辺清彦先生)

公益財団法人
日本植物調節剤研究協会
技術顧問
森田 弘彦

2. 「馬來野生食用植物圖説」

本冊子は、樹木：9、灌木：5、蔓草：4、野草：17、濕草：5、水草：10種の合計50種の主に野菜の代用となる植物を図説したもので、「食用野生動植物」とは、編集が「昭南博物館・昭南植物園」と逆に記されたのみで、1943年11月の「序」の日付も1944年1月の刊行も同時である。つまり、この2冊子は同時並行的に準備・刊行されたが、「食用植物圖説」はCorner先生が「思い出の昭南博物館」で述べたものとは別である。何より、「序」は、穏やかな前者と一転して下記のように「英・蘭」の植民地支配を激しく非難する文章で、さらに「序」のマレー語訳と日本語での「現地人の指導の参考」の付いた、戦時色の強い内容である。

「・・・この自然の恵を其の儘に享けて生活してゆくならば人々は恒に豊に安穩幸福であるべき筈である。然るに英、蘭人が、この地を領有して以來、彼等は其の天地自然の恵を巧に^(マ)を肥彼等の利益のみに利用して、現住民の安寧幸福は更に顧るところがなかった。即ち英、蘭人は其の懐す為には天地の大道、自然の理に反して、土地を農業本來の目的たる生活必需物資(米・雜穀・野菜等の食糧、その他)の生産に用ふることを全く無視して、農業を企業化することにより、商品(護謨、砂糖、椰子油等)の生産のみに利用したのである・・・」

1ページに2種を配して、和名、科名、マレー名をカタカナで記した後、クサトケイソウを例にとると、以下の解説文がある。

「クサトケイサウ (トケイサウ科) (チムンドウンダン、アカムンチムン)

野原、路傍などに生育する草本で、卷鬚で纏繞する。莖長二一五米。葉は二列互生し、小托葉と長葉柄があり、心形で三裂する。花は腋生し、長梗がある。花下の苞三枚は毛状に細裂する。花弁曇白色。果實長球状。若葉も芽も青酸を含むから必ず先づ煮て用ひる。果實も同様である。」

図はとても精密かつ本格的な植物画で、解説文と合わせて

植物学の専門家の手になったことがわかる。Corner先生達の「食用野生動植物」の編集作業で野菜などの部分が欠落していることに気付いた「昭南博物館・植物園」の関係者が、この部分の補充を目的に編集したものと思う。

ところで、「馬來野生食用植物圖説」の50種に、新たに70種を加えて樹木：17、灌木：14、蔓草：9、野草：65、濕草：5、水草：10種の合計120種の図説からなる「南方圏救荒植物」が、1944年6月に「司集団軍醫部」という所から刊行された。この「はしがき」には以下のようにある。

「食用植物の多くは古來栽培せられて居るが此等以外に尚ほ野生の草木で食用になるものは澤山ある。又栽培植物でも觀賞用か食用かなど用途の良く識別せられて居ないものもあり、栽培植物の食用し得る部分でも捨て、顧みられぬものもあり、又特殊な味や臭がある爲に利用せられないが適當に所理すると充分利用できるものも少なくなく、極端な場合として有毒成分を含む植物でも所理の仕様に由つては食用となるものもある。香味や舌觸りの良否を別とすると食物の必要成分は結局蛋白質脂肪炭水化物無機塩類及びビタミン類に歸着するのであり、胃の腑へ入った後を考へると何んな料理でも大差はない。只消化の難易が問題として残る丈である。以下食用植物の主なるものに就いて説明して見やう。(後略)」

「はしがき」は極めて穏やかで、上記に続いて多くの有毒植物の毒抜き方法を紹介しており、「食用植物圖説」と同じ人が書いたとは思えないが、その末尾に「此等植物は大小様々であるが皆同大の圖に縮小せられて居るので圖の傍に5cmの尺度を付けて大さの標準とした。」とあって、「圖説」からの50枚の植物図を含めてスケール、さらに学名が付されている(図-6)ので、これは明らかに「圖説」の増補版である。

筆者の手元にある「南方圏救荒植物」は(独)国際農林水産業研究センター図書館所蔵のコピー本からの複製で、そこには「郡場寛 司集団軍醫部」や北海道大学のある教授からの贈呈に関する手書きの文字が残っている。「南方圏救荒植物」が郡場寛先生の手になったとすれば、元になった「馬來野生食用植物圖説」も昭南植物園長の郡場先生の作品であろう。



「馬來食用野生植物圖說」



「南方圈救荒植物」



「南方圈有用植物圖說」



「馬來食用野生植物圖說」



宮崎県、宮崎市にて (2015年7月)



インド、ハイデラバードにて (2015年10月)

図-6 「馬來食用野生植物圖說」からスケールと学名を付して「南方圈救荒植物」に使われた植物図の例、カミボウキ (*Ocinum sanctum* L.)

図-7 「南方圈有用植物圖說」と「馬來食用野生植物圖說」での植物図の例。マルバツユクサ (*Commelina benghalensis* L.) の図と生植物

郡場寛先生は、日本を代表する植物生理生態学者で、東北帝国大学農科大学を経て京都帝国大学理学部で教鞭を執り、1942年に定年退官されて昭南植物園長に赴任された。昭南植物園における郡場先生の仕事ぶりなどはCorner先生の「思い出の昭南植物園」に詳しいが、先生が植物画を作られたか否かは触れられていない。

Corner先生の同僚で植物園長を務め、戦後にはSingapore大学で植物学の教授となったRichard Eric Holttum博士は、マラヤの植物に関する著書の中で使用した植物の線画が、女性の植物画家と植物園に勤務する画家の作品である、としている(Plant life in MALAYA, 1954, 1977 新版)ので、植物園に標本画を専門とする職員がいたのかもしれないが、「馬來野生食用植物圖說」の図は郡場先生のものと思う。

3. 「南方圈有用植物圖說 第壹編藥用植物・第貳編食用植物」

「南方圈有用植物圖說」の「第壹編藥用植物」には、シダ類を含めて57科175種の図説と図を省略した19種、合計194種が、また「第貳編食用植物」には1枚に2種以上を取めた図を含めて700枚の図説である。2冊の奥付には、「編

輯責任者 渡邊清彦」と明記されている。太平洋戦争の最終局面で刊行された冊子に具体的な担当者名が記された理由は不明であるが、それぞれの「緒言」には郡場先生が植物園長として指導した、ことも明記されている。

【第壹編】「・・・本編は 馬來軍政官 藤村益蔵少将の命により昭南植物園長 陸軍司政長官 理学博士 郡場寛 指導の下に、陸軍司政官 理学博士 渡邊清彦 主として其の編輯を行ひたり、取むる圖は編輯者自ら畫けるものにして大部分は生鮮の實物を材料とせり只數種乾燥標本より畫けるものを混ぜ・・・」
 【第貳編】「・・・本編は昭南植物園長陸軍司政長官理学博士郡場寛指導の下に陸軍司政官理学博士渡邊清彦編輯を行ひ、取める圖は編輯者自ら畫けるものである、第一編に収めたもので本書に再出の圖も多少ある・・・」

「南方圈の藥用植物の手引き・・・」, 「南方圈の食用植物の解説が主・・・」とあって、「食用野生植物圖說」の「序」のような戦時色の強い言葉はないが、物資の調達に苦労したことが書かれている。【第貳編】が小型本になったのも印刷用紙が不足したためであろう。

渡辺先生の植物図の特徴は、識別のための要点を丁寧に描いた点にあり、前掲のクサトケイソウや、近年日本の温暖地以西で畑雑草として問題化したマルバツユクサ (*Commelina benghalensis* L., 図-7) にもよく現れている。きれいな筆記体で学名を記入し、図の下に簡単な説明を加えた形式は、そのまま「図説 熱帯植物集成」に引き継がれた。上記2種



アフリカ原産で熱帯に分布する *C. rutidosperma* (アフリカフウチョウソウ)

ムラサキヒメフウチョウ, *Cleome chelidonii* の図説 (南方圏有用植物図説 第貳編食用植物, p.166)

筆者がスリランカで「ムラサキヒメフウチョウ」と考えた植物 *C. chelidonii*, タイ中央部(タイ農業局, Dr.S.Zenguson tiporn 提供)

図-8 「南方圏有用植物図説 第貳編」での *Cleome chelidonii* (ムラサキヒメフウチョウ) は *C. rutidosperma* (アフリカフウチョウソウ)



①オランダ広場のキリスト教会 (マレーシア・マラッカ, 1991年)



②クアラルンプール国立動物園 (マレーシア・クアラルンプール, 1986年)

図-4 1980~90年代のマレーシアの風景

の解説文もほとんど同じである。

【第貳編】

マルバツユクサ: 雑草, 花コバルト, 全草食用, 飼料
 クサトケイソウ: 蔓草, 花瓣白, 花盤突起紫, 果はイガ状萼に包まれ橙熟し食用, 葉は煮食, 美味, 青酸を含む故必ずゆでて食すべし, 蔓は急に伸る故被覆植物として地面を覆ふに適す
 【熱帯植物集成】

マルバツユクサ: 雑草, 花コバルト色, 花卉小。
 クサトケイソウ: 蔓草, 花卉白, 副花冠は紫, 果はイガ状萼に包まれ橙色に熟し食用, 葉は煮食, 青酸を含むからゆでて食す, またカバークロップ

フウチョウソウ科の *C. rutidosperma* は, 熱帯アフリカ原産で東南アジアをはじめとする熱帯の農地や市街地に見られる雑草である。【第貳編】の166ページには, この植物とよく似た図が「ムラサキヒメフウチョウ (*C. chelidonii*)」の名で掲載され, 「図説 熱帯植物集成」にも収録された。筆者は, 1985年にスリランカでスケッチした植物を「図説 熱帯植物集成」によって「ムラサキヒメフウチョウ」と考えた。*C. rutidosperma* は3出複葉, *C. chelidonii* は3~9出複葉となることで識別されるが, 日本では後者の植物についての情報が不足していたこともあって, 筆者のように渡辺先生の図

に頼って誤解するむきも多々あった。近年, 日本に帰化した *C. rutidosperma* を, 大阪府の植村修二氏が正確に同定してアフリカフウチョウソウの和名を付けたので, 上記の混乱が解消された。*C. chelidonii* の方はタイ農業局の雑草科学者, S. Zungson tiporn 博士からタイの稲刈り後の水田に発生した, として問い合わせのあった画像の植物であった (図-8)。

こうした例外はあるものの, 太平洋戦争の終戦直前に原型を作った, 渡辺先生・Corner先生の「図説 熱帯植物集成」は現在でも東南アジアの熱帯 (図-9) を中心とする植物の教科書である。

Corner先生, 郡場先生, 渡辺先生はそれぞれ独自に植物画を蓄積されたようである。戦時下での食料確保の手引き書として作成された冊子ではあるが, それらは植物学的な調査・研究活動に裏打ちされた成果であった。太平洋戦争の終結から71年を経たが, 非常に困難な状況の下で現代の熱帯での植物や雑草の研究活動にも有益な情報を蓄積し, 残して下さった植物学者の先生方に改めて感謝したい。自分がその条件下に置かれたら, 果たしてこのようにできたであろうか, と思う。

(鹿児島大学農学部坂上潤一教授には, 同大学図書館蔵の「南方圏有用植物図説 第壹編薬用植物」の一部を複製していただいた。厚くお礼を申し上げます。)